

背景・目的

果菜類等の施肥の省力化や夏バテ対策のために利用される緩効性コーティング肥料について、サヤインゲンの慣行栽培と比較する調査を行い、施用効果を確認しました。



結果

調査区概要

次のとおり、総窒素換算量が両調査区で同量になるよう調整した。

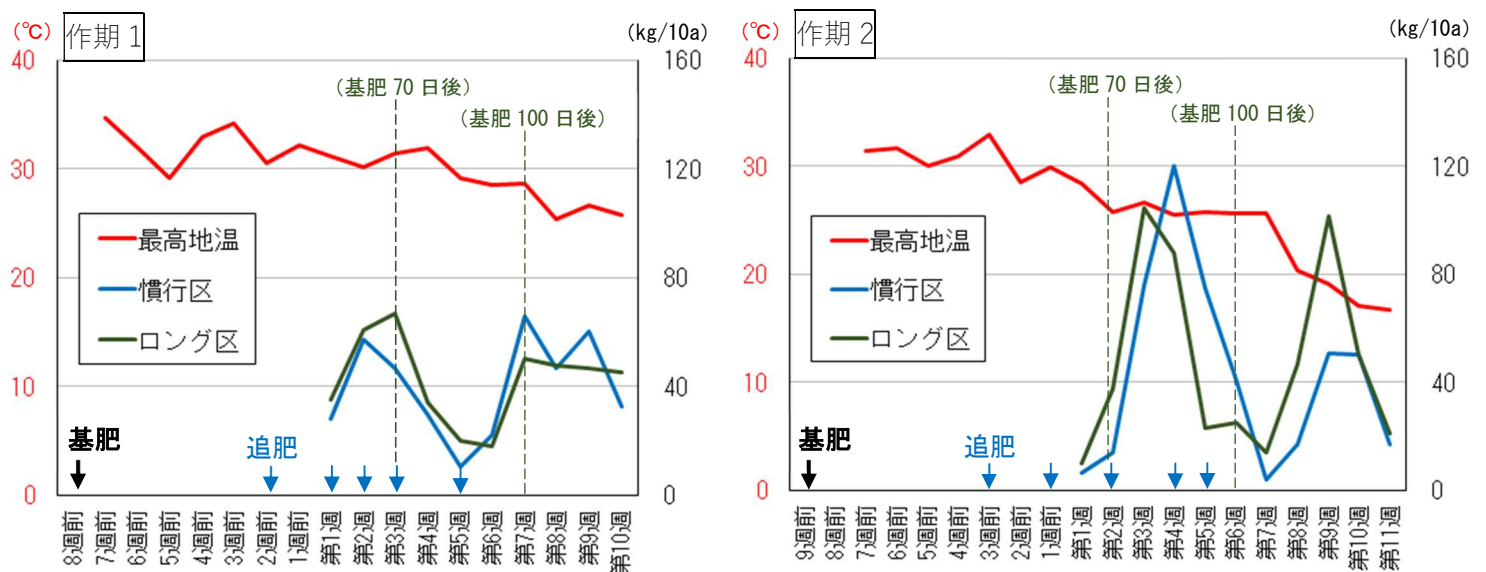
調査区	施肥量（窒素換算量）の内訳・合計（単位：N kg/10a）
慣行区	基肥 6.2、追肥 5.0（液肥 1.0×5回）、合計 11.2
ロング区	全量基肥。単肥 4.8、緩効性肥料（ロング肥料）70日タイプ 3.2、同100日タイプ 3.2、合計 11.2

規格内品の収量（kg/10a）（莢長 12cm 以上の莢を収穫した場合）

	作期 1（5/21 播種、7/9～9/15 収穫）						作期 2（6/27 播種、8/18～10/31 収穫）					
	AS 品	AM 品	BS 品	BM 品	BL 品	計	AS 品	AM 品	BS 品	BM 品	BL 品	計
慣行区	398	115	47	20	5	585	469	116	12	0	12	608
ロング区	424	97	44	10	0	574	521	72	24	4	2	622

※「A」は曲がり 1cm 未満、「B」は曲がり 2cm 未満の規格内品（外観等に異常がないもの）を示す。
 ※「S」は莢長 12cm 以上 14cm 未満、「M」は莢長 14cm 以上 16cm 未満、「L」は莢長 16cm 以上 18cm 未満を示す。
 （莢長 12cm 未満のものは調査対象外。また、莢長 12cm 以上 18cm 未満のものうち、不稔、過熟、病虫害等の規格外品も集計から除外している。）

週ごとの最高地温（平均値。シルバーマルチ使用）と AS 品収量（kg/10a）の推移、施肥時期



作期 1（10 週間収穫）、作期 2（11 週間収穫）ともに、収量はほぼ同じで、品質も同等だった

結果の活かし方

緩効性コーティング肥料の施用により、収量や品質を損なわずに、追肥を省略又は減少させることが可能です。ただし、一般に地温が高いと養分の溶出が早まるため注意が必要です。